

野菊の花

小川未明

青空文庫

正二しょうじくんの打ちふる細い竹ほそたけの棒ぼうは、青あおい初しよ秋しゅうの空そらの下したで、
 しなしなと光ひかつて見みえました。

「正しょうちゃん、とんぼが捕とれたかい。」

まだ、草くさのいきいきとして、生はえている土つちの上うえを飛とんで、清せい
 吉ちは、こちらへかけてきました。

「清せいちゃん、僕ぼくいまきたばかりなのさ。あさくらの桜きの木きの下したに、犬いぬが
 捨すててあるよ。」と、正二しょうじはこのとき、鳥とりの飛とんでいく方ほうを指さ
 しながら、いいました。

「ほんとう、どんな犬の子？」

「白と黒のぶちで、耳が垂れていて、かわいいよ。」

「それで、どうしたの。」と、清吉は、ききました。

「みんな、見てるよ。」

「困るね。僕たちの遊ぶ原っぱへ捨ててるなんて、だれだろうなあ。」

清吉の心は、もうそのほうへ奪われてしまいました。

棒を持った正二も、清吉についてきました。

二人は、並んで歩きながら、話をしました。

「このあいだ、どこかの若いおばさんが、ねこの子をこの原っぱへ捨てにきたとき、正ちゃんはおらなかつたかな。」

「ああ、おつたとも。僕^{ぼく}たち、ボールを投^なげていたじゃないか。まだ三十ぐらいのやさしそうなおばさんだつたらう。」

「なにがやさしいものか。だれか見ていないかと、くるくるあたりを見^みまわしてから、ふいに、ほいとねこの子を草^{くさ}の中^{なか}へ投^なげたんだよ。ねこはニヤア、ニヤアと泣^ないている。あまりかわいそうだから、僕^{ぼく}、おばさんを追^おいかけたのだ。なんでねこの子^こをこんなところへ捨^すてるんですか、かわいそうじゃありませんかといったのさ。」

「そうだったね。」

「そうすると、おばさんは、怖^{こわ}い目^めをして僕^{ぼく}の方^{ほう}を振り返^{かえ}つたんだよ。うちのねこじゃありませんよ、お勝^か手^てへ入^{はい}ってきてうるさ

いから、ここへ持つてきて置いていくのですと。」

清吉は、そのときのことを思い出すと、いまでも小さな胸が、熱くなるのを覚えました。

「しかし、よかつたね。洋服屋のおじさんがちようど通りかかつて、ねずみが出て困っているのだからといって、つれていってくれたので。」と、正二は、いいました。

「あのねこ、どうしたろうね。」

「いるよ。僕このあいだ前を通つたら、ガラス戸の中で、表の方を向いて、顔を洗っているのが見えた。」

「手をなめて、顔を洗っていたの、かわいいなあ。」

清吉も、この話をきいて、目を細くして笑いました。

「犬も、ねこも、みんななにも知らないので、かわいいよ。」
 「それなのに、この原っぱへ捨てるなんて、こんど、ここへ犬やねこを捨てるべからずと書いて、札を立てようか。」と、清吉がいいました。

「そうだね。僕たちの原っぱへ捨てられた犬やねこは、僕たちの責任となるからね。」

二人が、桜の木の下へやつてくると、小さな箱の中に犬が入つて、ほかの子供たちは、犬の頭をなでたり、お菓子をやったりしていました。けれど、まだやつと目があり、犬はただ小さな尾をぴちぴち左右に振るばかり、堅いお菓子を食べることができませんでした。

「おとこだよ。」と、年としちゃんが、いいました。

「君きみの家いえで、飼かわない？」

「めんどろだといつて、お母かあさんが、飼かつてくれないだろう。」

「このごろ、お米こめが足たりないので、みんなが犬いぬを飼かわなくなつたんだつてね。」と、一人ひとりが、いいました。

「自分じぶんが食たべる分ぶんを、ちつと分わけてやればいいのだろう。」と、

正しょうじ二じは、棒ぼうを土つちの上うえへ投なげて、犬いぬを抱だき上あげました。清せい吉きちは、

上うわぎ衣ぎのポケツトを探さがしていたが、破やぶれた鼻はな紙がみといっしよに五せん銭せん

の白はく銅どうを出だして、

「釣つりにいくとき、針はりを買かうのにもらつたのだ。これで牛ぎゅう乳にゅう

を買かつてきてやろうよ。だれか、いちばん家いえの近ちかいものが、おさ

らを持ってこない。」

すぐに、勇ゆうちゃんは、かけていきました。

やがて、一枚まいのさらを持ってきました。

「このさらいらないの。」

「いらないよ。」

清吉せいきちと勇ゆうちゃんは、町まちの方ほうへ出でかけていきました。二人ふたりがい

なくなつた、後あとでした。

「年としちゃん、だれか犬いぬの子こをもらうものはないかね。」と、正しょう

二じが、いいました。

「捨すて犬いぬをもらうところがあると、いつかお父とうさんがいったよ。」

「どこだい、きいておくれよ。」

「お父とうさんが、お役所やくしよから帰かえったらきく。」

「殺ころしてしまうんでないだろうな。」

「年としちゃん、殺ころすんだったらだめだぜ。」

「もちよ。」

小犬こいぬは、腹はらがすいたか、母犬ははいぬのお乳ちちが恋こいしくなつたか、クン

クン泣ないていました。

二

白しろいシャツに、白しろい帽子ぼうしをかぶつて、青あおい車くるまを引ひいた青せい年ねんが、
あちらから走はしつてきました。日ひの当あたる道みちには、ほかに人影ひとかげも

なかつたのです。

「あつ、牛乳屋さんだ。」

「牛乳売ってくれるかしらん。」

ふたり
二人は、その方をじつと見ながら、さきやきました。

「牛乳屋さん！」と、清吉は、走って近づきました。

「お乳をちつとばかし、売ってくれない？」

「なににするんだい。」

「犬にやるんだよ。あすこの原っぱに、生まれたばかりの犬ころ

が、お腹がすいて泣いているのだ。」

「ちつとばかしでいいんだねえ。」と、勇ちゃんは清吉の顔を

見ながら、おさらを牛乳屋さんの前へ差し出しました。

かじ棒ぼうを握にぎつたまま、二人ふたりを見ていた青年せいねんは、

「ここには、余分よぶんがないから、お店みせへいつてきいてごらん。」と、
答こたえました。

「お店みせってどこなの。」

「ここを曲まがって、ずっといくと火ひの見みやぐらがあるだろう。その前まえの花屋はなやの横よこを入はいつたところだ。」

牛乳屋ぎゅうにゅうやさんはいそがしそうに、いい残のこして、また威勢いせいよく走はしつていききました。小石こいしの上うえを箱はこがおどるようです。ふり向むくと、

ほこりが風かぜに吹ふかれていました。

二人ふたりは教おしえられた牛乳店ぎゅうにゅうてんへいききましたが、店みせさきに、西に

日しびが当あたってテーブルの上うえには、新聞しんぶんが拡ひろげられていました。

そして片方かたほうのたなには空あきびんがずらりと並ならんでいました。

「牛乳ぎゅうにゅうを五銭せんくださいませんか。」と、清吉せいきちがいました。

店みせにいた、おかみさんが、

「いま、ちつともないのですが。」と、断ことわりました。

二人ふたりは、たぶんそんなことだろうというような気きもしたので、

格別かくべつ驚おどろきも、力落ちからおとしもしませんでした。

「僕ぼく、帰かえったら、赤あかちゃんにやるのを、ちつとばかし分わけてもら

つてくるよ。」と、勇ゆうちゃんがいきました。

「この五銭せんで、ビスケットを買かってやろうか。」と、清吉せいきちは、

あたりの店みせを見みながら、歩あるきました。

そのころ、牛乳ぎゅうにゅうを配達はいたつする箱車はこぐるまを引ひいた青年せいねんは、

白しろのことを思い出しおもて出だしていました。

彼かれが少しょう年ねんで、まだ田舎いなかにいますとき、村むらに白しろという宿無やどなし犬いぬ

がいました。やせたあまり大おおきくないめす犬いぬであつたが、宿無やどなし

犬いぬといふので、その犬いぬがお勝手かってもとへくると、どこの家いえでも水みずを

かけたり、石いしを投げなつけたりしました。やさしい顔かおでもして、犬いぬ

がいつくのを怖おそれたからです。つえをつかなければ歩あるけないよう

なばあさんまでが、妙みょうなかつこうをして、そのつえで犬いぬをたたこ

うとしました。また外そとで仕事しごとをしているじいさんでさえ、「こい

つめ。」とか、なんとかいって、石いしを拾ひろつて投げなつけました。

あるとき、その犬いぬが、どこかの物置ものおきで子供こどもを生うむと、その家いえ

の人ひとたちは、みんなその子こを川かわへ流ながしてしまいました。

白は、人間の無慈悲にとうとう気が狂って、ようすの変わつた人を見ると、かみつくようになり、夜ごとに子供を思い出しては、悲しい声で泣き叫びました。

その傷ましかつた光景が、少年時分の彼の心に刻みつけられて、いまでも忘れないのであります。

青年は、二人の子供が、子犬のために牛乳を探している、やさしい心をいじらしく思わずにはいられませんでした。

「おや、まだ、みんなが、鳴いているね。」

このあいだのあらしの夜、まったくきかれなくなつたので、勇ちゃんは、顔を上げて、原っぱの空を見まわしていました。

「きつとおそく生まれたんだよ。お友だちがいなくてさびしいだ

ろうな。」と、年ちゃんがおそくこの世に出たみんなに同
情ようしました。

「あつちの森もりの方ほうだな。」

そういつたきりで、またみんなの目は、小犬こいぬの上に止とまりました。小犬こいぬは、清吉せいきちと勇ちゃんゆうの持もつてきたビスケツトを尾おをふりながら食たべていました。その姿すがたは、正直しょうじきな清きよらかな心こころの少年しょうねんたちを動うごかして、いつそうかわいそうなものに思おもわせたのです。

「どれ、どんな犬いぬだい。」

そこへ、牛ぎゆう乳にゆうのびんを持もつてやってきたのは、先刻車さつきぐるまを引ひいていた青年せいねんでした。

「ポイントのまじりだね。さあ、これをやろう。」

青年せいねんはしやがんで、さらの中なかへ、白しろいとろとろとしたおいし

そうな乳ちちをびんからうつしました。雑草ざっそうの間あいだに、一輪紫りんむらさきいろ色

の野菊のぎくが咲さいていたが、その清きよらかな目めで、これを見守みまもっている

ように思おもわれました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

※表題は底本では、「野菊《のぎく》の花《はな》」となつて
います。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

野菊の花

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>